

研究者と幸運

杏林大学医学部感染症学 神 谷 茂

大学院生の頃、指導教授から優れた研究者になるためには4つのG（ドイツ語のGである。指導教授の若い頃、医学はドイツ語が頻用されていた）が必要であることを教えられた。4GとはGeschick（技術）、Geduld（忍耐）、Geld（資金）とGlück（幸運）である（後年、これは秦佐一郎博士とともに駆梅剤サルバルサンを発見したDr. Paul Ehrlichの言であることを知った）。前3者はなるほどと理解できたが、Glückについては少なからぬ抵抗感を覚えた。

偉大な細菌学者であるDr. Louis Pasteurは数々の金言を残したが、最も有名なものが以下である。

“Chance favors only the prepared mind.” (La chance ne sourit qu’aux esprits bien préparés.)

邦訳として“幸運は準備の出来ている人のみを訪れる”が多いようである。ChanceとGlückとが同一であるとは思われないが、Dr. Pasteurでさえ研究における「幸運」の重要性を認識していたことが窺われる。

Dr. Pasteurの金言にふれて、想起されるのは2005年のノーベル生理学・医学賞を受賞したオーストラリアのDr. Robin WarrenとDr. Barry Marshallによるピロリ菌発見物語である。彼らは胃粘膜材料100例を対象として胃内に棲みつく病原細菌を分離培養するプロジェクトを開始した。最初の34例は全て培養陰性の結果であったが、35例目の材料の培養はイースター休暇直前に行われたため、通常の培養期間の2日間を本検体についてのみ5日間とした。休暇を済ませ研究室に戻ったDr. Marshallは培養器からシャーレを取り出し、わずか1mm程度の細菌コロニーが形成されていることを発見した。ピロリ菌発見・分離培養成功の記念すべき日（1982年4月14日）であり、以後彼らは全ての生検材料の分離培養期間を5日間に変更した。“ピロリ菌発見は幸運の賜物である”と言われるかもしれないが、休暇直前に培養期間を延長してまでも実験を継続したDrs. Warren & Marshallの“the prepared mind”に依るところが大きいものだと思っている。

自分自身は果たして研究において運が良かったのかと問うてみるが答えはまだ出ていない。大学院生の頃、ヒト胎児肺線維芽細胞を用いてヒト内在性レトロウイルスの持続感染系を作り上げ、性状解析をしたことがある。感染後1か月位から髪の毛状の線維芽細胞はトランスフォームし、盛り上がった癌細胞様に変化してきた。腫瘍原性の認められなかったウイルスであったため、大発見なのではないかと思いながら研究を継続した。しかし、詳細な検討により、接種したウイルス液にウイルスを増殖するために使用した癌細胞が混入した結果であることが判明した。今思えば、本研究結果を英語論文にしなかったことが幸運であったかも知れない。ネガティブな顛末のストーリーではあるが、しばしの期間興奮しながら研究を続けたことを思い出す。杏林医学会員、とりわけ若い会員の先生方は医学・保健学・保健衛生学・健康科学の進歩のため、日夜、研究に精を出していることであろう。「技術」を磨いて、地道な研究を「忍耐」強く継続することにより、結果として「資金（グラント）」と「幸運」がついてくるものと確信している。更なる精進を大いに期待している。